

「北極圏旅行記 2017 夏 (31)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋
～8/1 マスグンス村を巡る～

スノー・キャビンのご主人は、Masugnsbyn (マスグンス村) の出身で、この小さな村に誇りを持っている。「小さな村だが、車で案内するよっ! 30分、30分!」と言うので、喜んでお願いした。

Masugnsbyn の "masugns" はスウェーデン語で「溶鉱炉」、"byn" は「村」という意味である。スウェーデン北西部の地名は「Svappavaara」「Nattavaara」など、フィンランド語由来の地名が多い。その中で、Masugnsbyn は純粹にスウェーデン語の地名として、非常に貴重な存在だと思う。



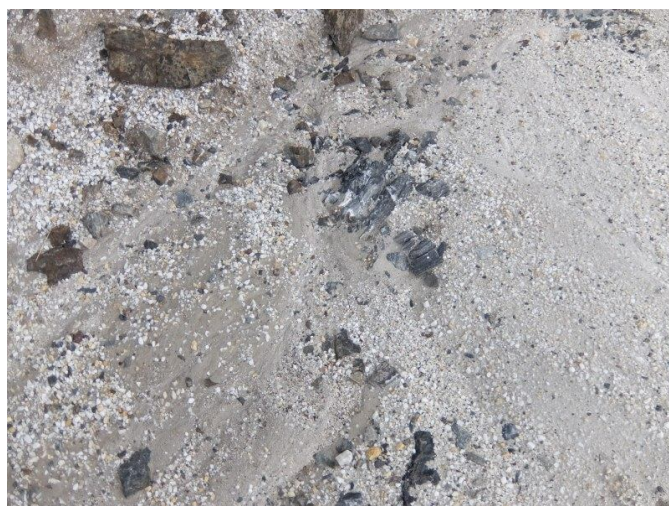
「溶鉱炉の村」の名の通り、まずは、古い製鉄所の跡地を案内してもらった。Gällivare (イェリバーレ) にある「コーク・スタン (鉄石の村)」を小規模にしたような場所だ。溶鉱炉は、現在は稼働していない。



しかし、鉄山は健在で、現在でも露天掘りで鉄鉱石を採掘している。宿のご主人は、臆せずに車を進め、露天掘り鉄山の底まで連れて行ってくれた。



相当に危険な場所で、通常観光客は来ない所だろう。



鉄山の底には、砂利に交じって、鉄鉱石がたくさん落ちていた。このあたりで産出する鉄鉱石は、マグネタイト (磁鉄鉱 = Fe_3O_4) とヘマタイト (赤鉄鉱 = Fe_2O_3) の2種類だが、ここのもは主に磁鉄鉱だった。私は一つ拾って帰ることにした。

現在、この村では鉄鉱石の製錬は行われていないので、キルナの Luossavaara-Kiirunavaara Aktiebolag (LKAB) の鉱山に運び込まれる。LKAB (ABは株式会社の略) はルーレオに本社のある、スウェーデン最大手の鉱山会社だ。実は Masugnsbyn は、1642年に最初に鉄鉱石(磁鉄鉱)が発見された、LKAB 史上、記念すべき土地なのだ。



溶鉱炉の近くに、小さな木製の橋がかかっている。この橋の下には、それほど幅の広くない川が流れている。説明されなければ何の変哲もない川だが、実はこのすぐ下流で Rautajoki kanjon (ラウタヨッキ渓谷) という、非常に深い渓谷に変貌する。



“Rautajoki” はフィンランド語の地名 (川の名称) で、“rauta” は「鉄」、「joki」は「川」の意味だ。Rautajoki kanjon をそのまま訳せば「鉄川渓谷」と厳めしい名称になる。このあたりの地勢に誠に合致した、すばらしい地名と言える。試みにアイヌ語に訳すと「カニナイ」または「カニベツ」となる。「科仁内」「蟹別」あたりは、北海道に実際にありそうな気がするが、私のアイヌ語地名の記憶の中には、残念ながらない。



ここが「鉄川渓谷」への入口の遊歩道だ。宿のご主人「よっしゃー！ついて来おーい！」とばかり、ぐんぐん先導してくれる。



自然豊かな森の道には、野生動物も現れるという。途中、ノウサギ、トナカイ、それにヘラジカの糞を何度も見かけた。キノコも非常に豊富だった。



遊歩道の終点にはちょっとした展望台があり、「鉄川渓谷」の全貌が見渡せる。「晴れた日にはフィンランドの山も見えんだぜ！」と教えてくれた。